

2026年6月20日(土)**メインシンポジウム**

♥ オンデマンド配信あり

15:50 ~ 17:50 | 第1会場 (ウインクあいち 2F 大ホール)

メインシンポジウム (専門医研修単位認定対象セッション) 補綴歯科の伝統を継承する

座長: 大久保 力廣 (鶴見大)、藤澤 政紀 (明海大)

[MSY-座長] [座長抄録] 補綴歯科の伝統を継承する

*大久保 力廣¹、*藤澤 政紀² (1. 鶴見大学歯学部口腔リハビリテーション補綴学講座、2. 医療法人新心会グループ／明海大学)

[MSY-1] クラウンブリッジ補綴の真髄

*石橋 寛二¹ (1. 岩手医科大学 名誉教授)

[MSY-2] 究極の入れ歯 (金属リテーナー義歯)

～歯と咬合のケアと看取り～

*阿部 實¹ (1. 西関東支部)

[MSY-3] ただひたすら好きなことを

*村岡 秀明¹ (1. 東関東支部)

[MSY-4] 歯科補綴科医になって良かった

*小宮山 彌太郎¹ (1. 東京支部)

メインシンポジウム

◆ オンデマンド配信あり

■ 2026年6月20日(土) 15:50～17:50 | 会場 第1会場（ウインクあいち 2F 大ホール）

メインシンポジウム（専門医研修単位認定対象セッション） 補綴歯科の伝統を継承する

座長：大久保 力廣（鶴見大）、藤澤 政紀（明海大）

補綴歯科の歴史を築いたレジェンドといえる先生方をお招きし、「補綴の力」を改めてお伝えいただく。クラウンブリッジ補綴学，全部床義歯補綴学，部分床義歯補綴学，インプラント補綴学の各視点から，補綴歯科で最も大切なこと，守るべき基本をご教示いただき，若手に期待する挑戦についてもご講演いただく予定である。

[MSY-座長] [座長抄録] 補綴歯科の伝統を継承する

*大久保 力廣¹、*藤澤 政紀² (1. 鶴見大学歯学部口腔リハビリテーション補綴学講座、2. 医療法人新心会グループ／明海大学)

[MSY-1] クラウンブリッジ補綴の真髄

*石橋 寛二¹ (1. 岩手医科大学 名誉教授)

[MSY-2] 究極の入れ歯（金属リテーナー義歯）

～歯と咬合のケアと看取り～

*阿部 實¹ (1. 西関東支部)

[MSY-3] ただひたすら好きなことを

*村岡 秀明¹ (1. 東関東支部)

[MSY-4] 歯科補綴科医になって良かった

*小宮山 彌太郎¹ (1. 東京支部)

メインシンポジウム

2026年6月20日(土) 15:50 ~ 17:50 | 第1会場 (ウイंकあいち 2F 大ホール)

メインシンポジウム (専門医研修単位認定対象セッション) 補綴歯科の伝統を継承する

座長：大久保力廣 (鶴見大)、藤澤 政紀 (明海大)

[MSY-座長] [座長抄録] 補綴歯科の伝統を継承する

*大久保力廣¹、*藤澤 政紀² (1. 鶴見大学歯学部口腔リハビリテーション補綴学講座、2. 医療法人新心会グループ/明海大学)

キーワード：補綴の力、伝統と継承、補綴歯科の歴史と挑戦

本シンポジウムでは、補綴歯科の歴史を築き、臨床・研究・教育の基盤を形づくってこられた4名のレジェンドの先生方をお迎えし、私たちが改めて教えを乞う機会としたい。クラウンブリッジ補綴学、部分床義歯補綴学、全部床義歯補綴学、インプラント補綴学の各領域を代表する先生方より、長年の歩みの中で大切にされてこられた守るべき基本、判断の拠り所、臨床で譲れない要点についてお話しいただく予定である。さらに、その基本を身につけ、磨き、後進へ伝えてこられた過程や転機、印象に残る症例・教育経験を通じて、補綴歯科における確かな軸を共有していただく。

情報があふれ、短期的で表層的な情報に目が向きやすい時代だからこそ、経験に裏打ちされた原理原則を確認し、患者の生活を支える補綴歯科の本質を見失わない姿勢を学びたい。次世代が何を守り、何に挑戦していくべきか、今後の課題と方向性についても示唆をいただき、補綴の力を再確認し、伝統を確かに引き継ぐ一助としたい。

メインシンポジウム

2026年6月20日(土) 15:50 ~ 17:50 | 第1会場 (ウインクあいち 2F 大ホール)

メインシンポジウム (専門医研修単位認定対象セッション) 補綴歯科の伝統を継承する

座長：大久保 力廣 (鶴見大)、藤澤 政紀 (明海大)

[MSY-1] クラウンブリッジ補綴の真髄

*石橋 寛二¹ (1. 岩手医科大学 名誉教授)

キーワード：サイエンスとアート、技術能力、症例の記録と分析

今から56年前、私は補綴学教室の新入医局員として押し寄せる患者数に戸惑っていた。歯科治療を求める社会情勢のなかで、特に補綴歯科に寄せる需要と期待は大きかったのである。社会人として、歯科医師として疑問と不安に満ちた気持ちでユニットの前に立つ日々であった。わが国は高度経済成長の時代、帯環金属冠から全部鑄造冠へ、継続歯からポーセレンジャケットクラウン・陶歯前装鑄造冠・陶材焼付鑄造冠へ、更にはオーラルリハビリテーションへとクラウンブリッジ補綴の革新が目まぐるしかった。

今回、歯科医療の重要な部分を占める補綴歯科、その中でクラウンブリッジ補綴の軌跡を辿りながら次世代への思いを展開したい。

医療の根幹をなすのはサイエンスとアートであり、患者さんのライフサイクルを考慮する視点を持つことが重要である。補綴歯科の要諦はレストレーションとメンテナンス、その要件を満たすための技術能力が求められる。クラウンブリッジ補綴の評価は常に生体サイドからなされなければならない。そして担当した全ての症例を記録し、分析・検討することを奨めた。これは歯科医師としての知識・技術を高める自己研鑽のために、更には良質の臨床研究を遂行するために不可欠である。

これらのことが人の生きる力をサポートする補綴歯科へと続くのである。

メインシンポジウム

2026年6月20日(土) 15:50 ~ 17:50 | 第1会場 (ウイנקあいち 2F 大ホール)

メインシンポジウム (専門医研修単位認定対象セッション) 補綴歯科の伝統を継承する

座長：大久保力廣 (鶴見大)、藤澤 政紀 (明海大)

[MSY-2] 究極の入れ歯 (金属リテーナー義歯)

～歯と咬合のケアと看取り～

*阿部 實¹ (1. 西関東支部)

キーワード：金属リテーナー義歯 (Metal retainer denture) と外骨格構造 (設計)、咬合の公差は究極 0 μm、最終義歯の意味

1. 最終義歯とは？

現補綴学用語と意味は異なるが、**金属リテーナー義歯**は患者の生涯最後の、文字通り**最終義歯 (究極の入れ歯)**として機能する。

2. 補強線から金属構造義歯へ

補強線に始まる義歯の強度・耐久性追求のトピックは“レールの発想”からの金属二重構造への進化にあった。川喜多二郎先生のKJ法、発想法等から臨床問題解決学としてのカルテ記載の重要性を学んだ。

3. 咬合の公差ゼロとは？

義歯の咬合精度向上に挑戦し、機能的咬合印象法と計測型咬合器による精密技工の開発で見えた景色。**公差ゼロの究極の咬合精度**として、咬合面同士が吸着する義歯を示す。補綴臨床の基軸は、歯科医の**設計**と技工士の**製作**の役割分担とチームワークにあり、**車の両輪**である。

公差は、製作物の精度を許容範囲で示す工学分野の用語。歯科界もデジタル化が進みつつある今日、公差の導入を提案する。

4. 歯と咬合のケアと看取り

極力抜歯をせず破折歯や動揺歯も保護延命を図り、最後は自然脱落まで看取る診療方針。歯科疾患を歯垢病・咬合崩壊病 (一生続く生活習慣病) と捉えて、長く患者に寄り添う義歯診療の考え方。その原点はE.K.Ross先生に学び、**歯の喪失という生涯学習**を“両面”から学ぶ学友が患者であると認識。

5. 補綴学的意義

金属リテーナー義歯と従来の金属床義歯のフレームワークを比較評価し、その**外骨格構造**のルーツが天然歯のエナメル質被覆構造に帰着することから、実はクラウンブリッジもインプラント上部構造も同じ外骨格構造として全補綴装置の構造設計が一元的に理解できる。

上記症例患者の同意を得ている。

メインシンポジウム

2026年6月20日(土) 15:50 ~ 17:50 | 第1会場 (ウイंकあいち 2F 大ホール)

メインシンポジウム (専門医研修単位認定対象セッション) 補綴歯科の伝統を継承する

座長：大久保力廣 (鶴見大)、藤澤 政紀 (明海大)

| [MSY-3] ただひたすら好きなことを

*村岡 秀明¹ (1. 東関東支部)

キーワード：総義歯、義歯装着体験、得意技

私が義歯装着体験を始めたのは2014年1月末のことである。67歳になる直前のことだった。それから12年過ぎた今、待望の上下無歯顎になった。総義歯装着を自分で感じそして試される時がきたわけだ。私は1972年神奈川歯科大学を卒業して、東京駅からほど近い自由診療中心の歯科医院に勤務した。卒業したての自分は主に見学である。3年ほどすると他院に勤務する同期の友人達の中には開業する者もでてきた。それに比べ自分は頭でっかちになるばかりであった。そこで、もっと多くの診療経験を積み重ねたいと、歯科医療過疎と言えるような地域の町立診療所に勤務して、1日に80人くらいを診療するようになった。そして現在地の千葉県で開業するようになったのだが、常に迷ってばかりいた。そんなある日「これから生き残る歯科医は」というテーマの講演会があり、その中で聞いた「得意技を持ちなさい」という言葉に衝撃を受けた。臨床は片寄らず満遍なくできなければいけないと言われるが、なかなかうまくいかない。そこでこの言葉を逆手にとって何かひとつ得意技を持てるように頑張ろうと考えたのである。得意技を持つという話をすると、何を得意技にしたら良いかと聞かれることがあるが、それは「好きな科目」である。好きこそものの上手なれという言葉があるが、なかなか上達しなくても好きなことだと頑張れる。私にとってはそれがコピーデンチャーであり義歯装着体験である。そして今年やっと上下総義歯装着に辿り着いたのである。その軌跡を少しだけ見ていただくことにする。

メインシンポジウム

2026年6月20日(土) 15:50 ~ 17:50 | 第1会場 (ウインクあいち 2F 大ホール)

メインシンポジウム (専門医研修単位認定対象セッション) 補綴歯科の伝統を継承する

座長：大久保力廣 (鶴見大)、藤澤 政紀 (明海大)

[MSY-4] 歯科補綴科医になって良かった

*小宮山 彌太郎¹ (1. 東京支部)

キーワード：インプラント Implant、力 Force、状況変化への融通性 Ability to adapt to changing circumstances

大学6年生の臨床実習では口腔外科に興味を抱き、卒後の進路として固まりつつあったが、補綴学助教授から度重なるお誘いを受けた。顧みるとその都度、『臨床科目の中で補綴学がいちばん嫌いです。』との、礼を欠いた返答をしてお断りをした。その背景には、補綴修復には患者の要求をはじめとして、あまりにも多くの因子が関連して、1年間の臨床実習からは消化しきれない難解な領域と感じていたのかもしれない。4回目のお誘いに根負けしたのか、あるいは今日では当てはまらないであろう『歯科の最終処置のほとんどが補綴ですよ。』との助教授の言葉に納得させられて、補綴学講座に残していただいた。大学院を修了し、修復症例が増えていく過程で、『この入れ歯は、今までの物の中で一番具合が良く、感謝しています。良く出来ていても自分の歯とは、まったく違いますね。』とのある患者の言葉にショックを受けた。そこで、欠如した歯冠だけを修復でき、咀嚼も回復できると言われていたインプラント療法に目を向けるようになった。換言するならば、他人の一言に左右された歯科医師人生と言えなくはない。今日のインプラント療法は、長きにわたり患者の優れたQOL維持に貢献できることが周知されている。インプラントに限らず、人造物の破壊のほとんどに力に関与し、長期を考えるならば生体だけではなく修復装置の経年的変化にも対処が求められる。力というものを考えられる補綴学に接することができたことに喜びを感じている。